

『梅雨るあずま荘』

く恋春アドレセンス夏の短編く

著者・八日なのか
発行・エクレール

六月に入って少し経った頃。

じめじめとした空気が部屋いっぱいに漂っていた。

エアコンなどという人を墮落させる文明の利器など当然なく、除湿器すらない我が家は、元からの室温も相まってさながら小さな熱帯雨林と化していた。

「とろけるう……」

「とろけちゃいますう……」

三日連続の雨天となった今朝。

ボサボサと髪の毛を掻きながら居間へ入ると、後輩とオバケが湿気と暑さでとろけていた。

「あ、センパイ。おはようご……」

「……………」

「……………ふう」

「…………やる気が出ないのはわかるが、おはようの挨拶ぐらい最後までしような」

じわっと薄肌に滴る汗が、まぶたを塗り固めているのか、未優は目を開けずに口を開けたまま、居心地悪そうに転がっている。

年頃の乙女が汗でしっとりしているのは妙に艶やかで素晴らしいのだが、興奮するのも面倒なくらいこの居間には快適さが欠けている。

いくら梅雨とはいえ、さすがに湿りすぎではないだろうか。

「ますたあ……汗ふいてー、気持ち悪いの」

「うげっ。おいコラ、その汗だくの手でオレの太ももにしがみつくな」

「べたべたあゝ」

「ええい、余分な塩分を擦りつけてくるな！ 蒸発させて固形の塩をキサマに振りかけるぞ」

「びえー、お塩はかんべ……」

「……………」

「……………ふう」

「決めセリフくらいちゃんと言おうな」

このふたりはもうダメそうなので、放っておくことにする。

暑さでもうろくしているのか、こやつらは扇風機の存在を忘れているようなので、ありがたく独り占めさせてもらおう。

「ん？」

部屋の隅にある扇風機のスイッチをおさなりに足で押そうとすると、足先にぶにゅつと変な感触。

見下ろすと、下半身を露出した千冬が扇風機に巻き付いていた。

「どうした？ オマエの大好きな兄さんはこっちだぞ」

「知ってる」

「あまり聞きたくないが、なにをしている？」

「妹のしっとりお股から蒸発した妹汁を扇風機の風にのせて拡散してる」

「卑猥な加湿器は必要としていないっ！」

「いやーん」

妹汁の霧を放つ千冬の尻を足先で扇風機からのけようとしたが、汗でつるんと滑った。気持ち悪い。

暑さで元からイかれている妹が、取り返しのつかない次元に到達してしまったようだ。

夏はすべて夏のせいになれば、なんとなく青春っぽい感じが出るものだが、後輩組の墮落っぷりを夏のせいにするのは少々荷が重すぎるだろう。

このまま居間に居続けるとオレもこの魔界に取り込まれてしまいそうなので、さっぱり朝シャワーでも浴びることにした。

「あら」

脱衣所には、お風呂あがりのさっぱりカミ姉がいた。

ふわりとシャンプーのいい香りが鼻先をくすぐる。

「残念だったわね、一春。もうちょっとタイミングが早ければ、お姉ちゃんの裸を覗けたのに」

まったくもってその通り、間が悪いことこの上ないが、しかし薄いTシャツ一枚で髪を梳いている姿もなかなかよいものだ。

「そうよね、しかもお姉ちゃん今ノーブラだし」

「ナチュラルに心の声と会話しないでくれ。混乱する」

まるで弟の考えていることなんて丸わかりよ、だってお姉ちゃんだもん！

……とでも言いたげに、胸を張るカミ姉。

ふたつの乳首がぼつりとTシャツの下から主張している。

「これが隣に住んでいる幼馴染みのお姉さんとかだったら、もう辛抱たまらないんだろうが、目の前にいるのは姉である」

「心読まれるからって、わざわざ心情を声に出さなくてもいいのよ」

ちよつと不機嫌そうにカミ姉が突っぱねる。

この姉、こういう拗ねるところはかわいいのだが。

あ、ちよつとうれしそう。ちよろい。

「どうでもいいけど、お風呂入るならさっさと脱ぎなさい。ちよろ春」

「ちよろかったのはオレだったのか……」

やはりカミ姉には勝てないのを思い知った、梅雨の日の朝であった。

「ちよつとどこ行くの、一春。いつからお姉ちゃんの前で服も脱げないようなシャイボーイになったのよ」

後ろ手に脱衣所のドアを閉め、姉の誘惑を断ち切るのだった。

「わーい！ 雨だー！ わーい！」

エロい姉のせいでシャワーを浴び損なったオレは、しとすと降り注ぐ雨の中、傘も差さずにスキップらんらんと道をゆく。

元より汗だくの身体だったので、今さら濡れたところで変わらない。

せっかくの梅雨だ。

童心に帰って、雨の日を満喫するのもまた一興。

だが少しでも冷静に己を見てはいけない、一春くんと約束だ。いいね？

梅雨の日なんぞに外出したがるのは、それこそガキと河童くらいなものだ。

「おや？」

「うわ、一春だ……」

出会って早々、知り合いの女の子にイヤな顔をされたとき、僕はどんな顔をすればいいんでしょうか。
う神さま。

「ひどいよ茉莉ちゃん……まだなにもしてないのに、うわって……うわって！ ……しくしく」

「なにもしてないって……雨の中、傘も差さなくても濡れ状態でスキップしながらニコニコしているいい歳した知り合いの男の子が道の向こうからやってきたらそりゃ『うわっ』てなるでしょ」

「たしかに」

くそう、茉莉ちゃん風情に理詰めで納得させられてしまった。屈辱。

「いくら夏だからって、そんなことしていると風邪引くよ？」

「あ、ああ……そうだな、そのとおりだ」

気付かないうちにオレも湿気にやられていたのか、頭が急激にすうーっと冷えていくのを感じていた。

あまつさえ、茉莉ちゃんに余計な心配までかけてしまって、なんとも言えない申し訳なさに苛まれる。

ここは最後まで頭のおかしいフリをしなければ、茉莉ちゃんに失礼だろう。

「ぶるぶるぶるぶる——っ！」

「きゃあっ!?! な、なに!?! いきなり!?!」

雨に濡れた犬よろしく、全身を回転させ、水気を吹き飛ばす。

だが犬のように上手くいかず、中緒半端に身体を捻るハニワみたいになってしまった。

「ぶふっ……うっ……ふっ……すす」

必死に笑いを堪える茉莉ちゃん。はずかしさのあまり、身悶えするオレ。

当初の計画では、身震いしたあと、茉莉ちゃんの前にワンコ座りして、ワンワンとかわいく鳴いてやろうという算段だった。

「きゅいーん」

「子犬みたいな声出しても拾ってあげないから」

「血も涙もないのか……そんなんだから脂肪ばかりが増えていくんだぞう！」

「うるさい！ 脂肪は関係ないでしょ！」

結局はいつものような言い合いになってしまった。梅雨と乙女心は難しいな。

「もう、今は一春の相手なんてしてる暇ないんだから、早くおうち帰って叶衣にでもかまってもら
いなさい！」

「こんな雨の日にまでダイエットとは、悲しいな」

「ダイエットじゃないわよ！？ おーっーかーい！」

よく見れば傘の手元から買い物用のエコバッグを提げている。

「おつかいなんて泉に押し付けて、泥んこ遊びでもしよーぜ！」

「童心に帰るのは勝手だけど、女の子を泥んこ遊びに誘わないで！」

「じゃあ、キューちゃんがいっしょに泥んこ遊びすりゅー！」

「アンタはどっから湧いてきたの！？」

「やーい、あとからやっぱりいっしょに遊びたいって言っても、茉莉はもう入れてやんないからな
ー！」

「あっちいけー！ お尻ぺんぺーん！」

「なんだったの……いったい」

猛然とどこかへ駆け出した二人組を茫然と見送る茉莉であった。

「叶衣ちゃん！ ただいまー！」

「おかえりー、つてどしたの？ ほっぺた真っ黒だよ？」

いよいよ後に引けなくなったオレは、便乗してきたキューちゃんといっしょに近所の公園で本当に泥んこ遊びに興じ、それが意外と楽しくて熱中してしまい、近所のガキんちよらにドン引きされるというちよつとした事件を経て、無事あずま荘へと帰還した。

「キューちゃんといっしょに泥んこ遊びしてきたんだぜー……はあ」

「あ、本当の意味でおかえり……もぐもぐ」

梅雨だろうとなんだだろうと、まんじゅうを頬張る叶衣の顔を見て、ようやく現実世界に戻ってくる事ができた。

「なんだか、長い夢を見ていたようだ」

「夏の田んぼの青臭いにおい、駄菓子屋で買った棒アイスの味、もう二度と戻ってこない夏」

「おい、やめろ」

のほほんとした表情で人の心を抉ろうとする叶衣。

懐かしいと思ってしまった時点で、もうあの日の青春は戻ってこない。

「だるーん……」

「ささくれ立った、ほっと心に、幼馴染み」

どうやら叶衣も暑さで少しポエマーになっているようだ。

「かなえー！ お腹すいたー！ ……ってましたー！？ ぴえー！？」

「どうしたんですか、ひいちゃ……はわわっ！？」

朝は元気のなかったオバケと後輩がハキハキとした声で廊下に飛び出てきたと思えば、なんと全裸だった！

「モラルハザード！」

ばたんっ！

「ありやま。カズちゃんが鼻血出しながら倒れちゃった」

「ちよっとアンタたち。いくら熱いからって全裸はダメよ。パンツぐらいはきなさい」

「そっちの方がむしろ好き……」

「ヘンタイさんだねえ……もぐもぐ」

疲れと暑さと興奮で朦朧とする意識の中、はっきりと見えたのは、

全裸で大腿を開き、扇風機をだいしゅきホールドする妹の姿だった。